自　他　欺　瞞　論

桜　井　芳　生

【要　約】

本稿は，特に検閲的管理者がないもとでの情報流通において，欺瞞的コミュニケーションが，どの程度流通し，そしてまた，非欺瞞的コュニケーションがどの程度流通しうるかについての，単純な一つのモデルを提供することを目的とする。本稿はとくに，昨今大きな流れになりつつある「進化論」的アプローチに棹さそうというものである。まず，ミーム論を概観し本稿の問題視点からの不満点を三つ指摘する。我々の提示するモデルは，これらの三不満点を克服することを目指すものである。我々の結論は，我々のコミュニケーション（の一部）を，「他者をだますために，まず自分をだます」ようないわば「自・他・欺瞞」としてとらえる，ということである。そしてその発展形態としての「ワレワレ欺瞞」としてとらえるというものである。このモデルによって，当初の三つの不満点がどれほどクリアされるかを確認する。最後に，このアプローチの今後の課題を確認する。

【インターネット時代における，「欺瞞」コミュニケーションの問題性】

社会におけるコミュニケーションは昨今インターネット化している。いままでの「マスメディア」に大きく依存していたコミュニケーションとは，異なった風なコミュニケーションを，我々は否応なくせざる得なくなっていくのではないだろうか。

マスメディアに大きく依拠して時代においては，われわれは，「ある程度信じてよい権威」「つねにすでに信じてしまっている権威」としてのマスメディアに依拠することで，日々のコミュニケーションの多くをおこなったきたといえるかもしれない。いわば，個々の情報の「信頼性の吟味」という「負担」を

かなりマスメディアによって免除されたきた，といえるだろう。

しかし，いまや，インターネットの時代である。もちろん，当面マスメディアの重要性は消滅はしないだろうが，少なくともインターネットを経由したコミュニケーションの比重は増していくだろう。とすれば，マスメディアという権威・実際上の検閲者なしで，「欺瞞」的情報（ウソの情報）の流通の可能性は，たかまるだろう。（もちろん，マスメディアのもとでも欺瞞的情報は多く流通していたかもしれない。これは，ここでは問わないことにしよう）。とすれば，近未来においては，社会の中でいかに欺瞞的情報が流通するのかについての見識を各当事者がもっていることが望ましいこととなりそうだろう。（「欺瞞」に関する本稿の定義は，後述する）。

本稿は，以上のような特に検閲的管理者がないもとでの情報流通において，欺瞞的コミュニケーションが，どの程度流通し，そしてまた，非欺瞞的コュニケーションがどの程度流通しうるかについての，単純な一つのモデルを提供することを目的とする。

いま，「単純な」「一つの」モデル，と言った。こう述べた含意はいうまでもない。まず第一に本稿のアプローチは，「ある一つのアプローチ」にすぎない。おそらく私たちが，分析対象とする社会はとても複雑なものだろう。とすれば，われわれの「武器庫」には，複数の「武器」の選択肢があることがのぞましいだろう。その武器庫の中にある複数の武器が，目前の状況にたいしてそれぞれどれほど性能がありそうなのかが，相対的に評価されるだろう。われわれとしては，われわれのアプローチが，一つの武器として読者の武器庫に採用されることを希望している。われわれはある「一つ」のアプローチを提示するが，それは他の諸アプローチの棄却をもとめるものではない。

「単純な」と言った含意もいうまでもない。わたしは上記の問題意識で，あるアプローチを構想する。が，その第一歩は，以下本稿で述べるような「最単純モデル」になってしまうということである。モデル構築・理論展開の定石は，このようにまずは最単純のモデルを構築し，それにおいおいパラメーターの変異や副次的要因を追加していくことだとおもう。本稿で述べるモデルは，その

意味で，単純で幼稚に見えるだろうと筆者も予期する。もちろん筆者も，現実のコミュニケーションは，もっと複雑なものであると考えている。あくまで，記述の順序として「最単純モデルから始める」ということにすぎないのである。この点どうかご容赦いただきたい。

【他の諸アプローチとの関係】

本稿は，ミーム論をはじめとする進化論的アプローチの流れに棹さそうとするものである。読者は上記の問題意識とわれわれのアプローチが，現代社会学の主流的な著名な諸理論といかなる関連をもつことになるのか知りたくなるかもしれない。まずは，現代社会学諸理論をわずかであるが瞥見しておこう。

まず第一に注目されるのは，社会システム論だろう。たとえばルーマンは，こう言っている。

「コミュニケーション能力の上昇は同時にまたコンフリクトの生起する確率を高めるということから，出発する事ができる。言葉は，ノーの可能性のみならずそのノーを隠蔽する可能性を作り出している。つまり，言葉は，嘘をつく可能性，欺瞞の可能性，人をだますシンボル使用の可能性を生み出している。文字や印刷といったコミュニケーションを拡張するメディアによって，相互作用システムに典型的に見いだされるコンフリクトの抑止が取り除かれている。そのことと関連して，シンボルとして一般化させたコミュニケーション・メディアが分化し特定されることにより，受容をコミュニケーションにおいて要求する可能性が著しく増大しており，その結果，，，（中略以下同様），，，，拒否の生じる確率は高くなっている，，，，，，。真理のばあいには，愛のばあいと逆になっている。なぜなら，真理のばあいにはコードは，あらゆる人びとにとって例外なく承認されるに妥当性のよりどころを求めている（あるいは少なくともそのように象徴化されている）からであり，いっさいのコミュニケーションは，批判に，つまり否定に，ひいてはコンフリクトに依拠しているからである。(Luhmann1984＝1993－1995：690)」

上記のことから，いくつかのことが読みとれるだろう。まず，ルーマンにあっ

ても，言葉によって「嘘をつく可能性」「欺瞞の可能性」が開かれることが，着目されている。しかも，「文字や印刷」といった「コミュニケーションを拡張するメディア」によって，「相互作用システムに典型的に見いだされたコンフリクトの抑止が取り除かれている」と考えられている。欺瞞の可能性がもたらす危険性は増大すると考えられているのだろう。しかし，「シンボルによって一般化されたメディア」によって，このようなコンフリクトが，いわばうまく位置づけられる。まさに，彼の言う「メディア」は，「コミュニケーションの危うくなる地点に立ち現れ，まさしく不確実さを確実さに変換させる機能に資している」(Luhmann1984＝1993－1995：252）ことになる。

わたしは，このようなルーマンの社会システム理論の貢献を高く評価したい。しかし，このような「分化し特定化」された「シンボルによって一般化されたメディア」(典型的には，真理・愛・権力・貨幣）にうまく分類されないようなコミュニケーションが，ふたたび比較的大きな意義をもちはじめているようにわたしには感じられるのである。そして，そこでの「欺瞞」的コミュニケーションがいかなる振る舞いをするのかが，また大きな意義を持ち始めているようにわたしには感じられるのである。この点をうまく分析する「武器」が，社会システム論の「武器庫」にはあまり揃っていないように感じられる。

第二に，山岸俊男の一連の「信頼」論が注目される。日本人とアメリカ人とを比較したある調査から山岸の議論は始まる。それによると，アメリカ人の少なからずが「たいていの人は信頼できる」と回答しているのにたいして，日本人では少数のみがそう回答している（山岸1999：26)。これは日本社会は信頼社会でありアメリカ社会はドライな社会だという常識に反している，と山岸は考える。ここから山岸はさまざまな社会心理学的実験・調査をおこない，それをふまえて，日本人社会は安定した社会関係の内部でのみ人を信頼するいわば「安心」社会であったのであり，それに比してアメリカ社会は未知の人間をも信頼しうるいわば信頼社会である，と考える。ただし，ここで注意すべきなのは，(山岸の読者にはいうまでもないことだが、）山岸は，ありがちな「日本人とアメリカ人の文化は違う」という議論をしているのではない，ということで

ある。

彼は独特の「文化」論を展開している。山岸は，文化の分析に進化ゲームの視点を導入する。「進化ゲームの視点からすれば，プレイヤーにとって有利な心理特性と，その心理特性にもとづくプレイヤーの行動の集積の結果として生まれる社会的環境（そこでは別の心理特性が有利となるかもしれない）との間には，ダイナミックな相互規定関係、、、、、，が存在している。そして，このダイナミックな相互規定関係は，ある特定の条件のもとでは均衡状態を生み出す可能性がある。、、、、，この二つ、、、、，（心理特性と、、、、，社会的環境）、、、、，の間に比較的安定した均衡が存在している場合に，そこに存在している心理特性と社会的環境との組合せ全体を「文化」と呼ぶことにしたい」（山岸1997：201）。

つまり，まず，ゲーム（の利得表など）が与えられる。そのもとで，ひとびとは，ある心理的特性（特定の他者にたいして「安心」しやすい，とか，一般的他者にたいして「信頼」しやすい，とか）をもつ。その心理的特性にもとづいて，行動をおこなう（目の前の他者を，「安心」したり，「信頼」したり，する）。その結果，行動の集積としての社会的環境が生じる（すなわち，当該の社会の多くの人が，他者を「安心」していたり「信頼」していたり，する）。しかし，その「社会的環境」のもとでは，当初の「心理的特性」がソンの場合（「そこでは別の心理特性が有利となるかもしれない」）もあればソンでない場合もある。ソンの場合には，別の心理特性が模索されよう。こうして，あらたな心理特性によって，新たな行動が選択され，行動の集積としてのあらたな社会的環境が生じる。しかし，ソンでない場合には，ここに，「比較的安定した均衡が存在している」といいうるだろう。こうして，ある心理特性と，その結果でありつつそれと相互に適応関係にある社会的環境，との組合せが生じ，この組合せのことを「文化」とよぶわけである。

日本社会も，徐々にこのような「安心」社会から「（一般的）信頼」社会への移行を余儀なくされている，と山岸は考えているようである。そして，未知の人間に関しても，どれほど信頼に値する人間であるかをみぬくことのできるような「社会的知性」の陶冶が，現在の日本人にはもとめられるいる，と山岸

は考えているようである。

このような山岸の仕事も，非常に評価できる，とわたしは思う。とくに，近過去日本における「安心」型の行動類型から，アメリカ型の「(一般的) 信頼」への移行が必要である，という指摘には，共鳴する日本人がおおいのではないだろうか。わたしは，本稿以降で，本稿の問題意識と山岸の視点を接続させることを構想している。が，まず，その前に，以上のような山岸的視点をモデルに組み入れるまえの単純なモデルにおいて「欺瞞」的コミュニケーションの流通の有無を記述することができるのではないか，と考えている。本稿は，いわば，そのような山岸的「信頼」論「文化」論・以前（論理的に言って，以前）の，「単純な，理想状況」における欺瞞コミュニケーションのモデル構築の試みである。

【ドーキンスの「ミーム」論】

本稿はとくに，昨今大きな流れになりつつある「進化論」的アプローチに棹さそうというものである。単純化していうと，進化論は，ダーウィンをいわば元祖とし，ウィルソンの『社会生物学』・ドーキンスの『利己的遺伝子』などを嚆矢として，今や狭い意味での生物学の範囲を超えた影響力を持ちつつあると思う。その一例として，ここ15年ほどのあいだに英語圏では市民権をえてきたといえる「進化心理学」の流れを指摘することができるだろう。本稿は，ダーウィン・ウィルソンから進化心理学への現代進化論の流れをさらに社会学の内部にまで進展させようとする試みの一つである。

本稿は，なかでもとくにドーキンス由来のミーム論をメインの出発点とする。まず，ミーム論を概観し本稿の問題視点からの不満点を三つ指摘する。本稿の作業の大部分は，この三つの不満を，進化論的アプローチの別の論者の議論をヒントにしたあるアイデアでもって，乗り越えようとする作業である。

周知のように，「ミーム」とは，ドーキンスが『利己的な遺伝子』（初版1976年）で提起した概念である。「人間の文化というスープ」（Dawkins1989＝1991：306）のなかで，ちょうど遺伝子と同様に，自己複製（つまりは，「模倣」）を

繰り返していく自己複製子を，ドーキンスは，「ミーム」と呼ぶ。「ミームがミームプール内で繁殖する際には，広い意味で模倣と呼びうる過程を媒介として，脳から脳へと渡り歩くのである」(Dawkins1989＝1991：306)。英語圏ではその後ミーム論はかなり大きな研究傾向として発展している。

その一端は，ブローディ（Brodie1995＝1998）やブラックモア（Blackmore 1999＝2000）の著作，また，“Meme Central”（Brodie 2000）や“Memetics”（Heylighen 1998）といったウェブサイトから見て取ることができる。

ドーキンスによって提起されたミーム論は，人間諸科学に不可逆的な大きな影響をあたえたと思う。が，現時点からふりかえってみると，そのインパクトは「尻つぼみ」であって，ドーキンスの初発の思いつき（エッセイ）をこえるような「約束の地」としての知的大業績は未だ到来していない，と感じられる。この一つの原因は以下であると考える。すなわち，ミーム論のインパクトの源泉の一つは，個体と，それが複製する複製子（模倣子・ミーム）との関係を，常識と「逆転」させたことにあった。しかし，では，なぜ，個体は，そのようなミームを複製（模倣）してしまうのか。この問題にかんして，ミーム論は，結局のところ，アドホックな説明に終始するばかりであった。こうして，ミーム論的視点による一大統一理論は，夢のままである，と思う。こうして，われわれが目指すモデルへの第一のリクエストは以下のようになるだろう。すなわち，

「1．ミーム論においては，個体がなぜその模倣子（ミーム）を模倣するのか，について，アドホックでない説明がない。この点アドホックでない，コミュニケーション・モデルを提示せよ。」

【老子の「美言」論】

われわれがミーム論に対して感じる不満の第二の不満点を指摘したい。この不満点を発想するにあたっては，（読者には唐突であるかと思うがわたしには）『老子』の文言がヒントになった。『老子』の最終節である。ここにおいて，「信言は，美ならず。美言は，信ならず」という有名な警句が発せられる。こ

の警句自体を承認する人は少なくないだろう。が，なぜ，このような信言でないような言葉が，世間を流通してしまうのか。あるいは，世間を流通しやすい「美言」とは，一体どのような謂いのことなのか。そして，そんな「美言」でない『老子』が，なぜ，二千年来も流通してきたのか，これを既存のミーム論は，ほとんど説明してくれない，とおもう。(以下本稿では，「信言」の含意を，ある当該の者がそれを採用・信用するに値する言葉，としよう。すなわち，本稿における「信言」の定義とは，「その言葉を採用・信用すると，その採用者の認識が，その採用者が期待する程度のおいて，ヨリ真理が近づく（「真理」の定義がいかなるものであれ，その採用者の「真理」の定義に準じて），ような言葉」である)。(また，「美言」とは，「「(上記の定義による）信言」でないにもかかわらず，世間を流通してしまう言葉」と定義しよう)。こうして，われわれが目指すモデルへの第二のリクエストは以下のようになるだろう。すなわち，

「2．なぜ信言でなく美言が世間を流通してしまうのか。美言でない信言が流通する余地・場合は，ないのか。この点を明らかにする，コミュニケーション・モデルを提示せよ。」

【J・S・ミル「自由論」】

ミーム論への第三の不満点を，わたしは（これまた読者には唐突で恐縮だが少なくともわたしは）J・S・ミルの『自由論』をヒントにして，発想した。そこにおける「言論の自由」論をめぐって，である。以上のようなミーム論と老子の「信言・美言」論の含意をいくらかでもみとめると，世間を流通するのは，「真」の言葉（ばかり）である，ということはありそうもなくなる。

もしそうだとしたら，（そうだとしても）言論の自由は擁護されるべきなのか，いなか。もし承認されるべきだとしたら（私は結局承認されるべきと同意するが)，その根拠はなになのか。これらの点を，既存のミーム論は，あきらかにしていない，と思う。こうして，われわれが構築を目指すモデルへの第三のリクエストは以下の通りになるだろう。すなわち，

「3．既存のミーム論では，J・S・ミルが主張する言論の自由論は，すぐには擁護できない。言論の自由論を擁護するなら，それに対して十分な根拠をもつようなコミュニケーション・モデルを，提示せよ。」

【他者欺瞞の有用性】

これにたいして，私案の提示を開始するしよう。そのために，進化論的アプローチの別の先行研究からいくつかの知見を援用してみたい。まず，第一は，ヒトを含む生物における「他者欺瞞」の有用性の確認である。

ライトは彼の著書『モラル・アニマル』において，こう，述べている。(Wright 1994＝1995下巻：125)

「ある種のメスホタルは，別の種のメスの交尾の合図をまねて発光する。そして間違えて寄ってきたオスを食べてしまう。ランのなかには，メスのスズメバチそっくりの形をしているものがある。勘違いをしたオスの体に花粉がついて，オスは知らない間にそれを遠いところまで運ばされる。また，毒を持たないヘビでありながら，からだの色は毒ヘビそっくりになってしまっているものもいる、、、、。」

以上のように，他者を欺瞞することが，有用である「場合がある」ということについてはいうまでない，だろう。

（他の者が誤って解釈する蓋然性がある情報を，他の事情（誤って解釈させる，という以外の事情）からはそうする誘因があまりないにもかかわらず，送出することを，「欺瞞すること」の本稿における「定義」，としたい)。

【「赤面」「正直」の有用性】

しかし，他方このように，「他者を欺瞞する」者が存在するというまさにそのことのおかげで，「正直」であるということが，独特の存在価値をもつということもあるだろう。フランクは以下のように，述べる。

「もし，信頼に値することと赤面することがひとまとめになっていて，信頼するに足ると思われれば有利になるというのであれば，選択圧は赤面する傾向

とそれを引き起こす感情の両方に作用するだろう」(Frank 1988＝1995：161)

フランクはここで，「赤面」するなどの，ヒトの自分のおもいどおりにならない現象を論じている。上記のように他者を欺瞞することが有利である場合があるのだとしたら，「ウソをつくと赤面する」などといったような現象が存在しないほうが，そのヒトには有利だろう。しかし，現実には，赤面現象などのように，ヒトの意識によってコントロールできないような自己呈示現象が存在している。それはなぜか。

この問題にたいして，フランクは上記のようにこたえるわけである。すなわち，複数の生物間においては，一方が他者を欺瞞したほうが，前者にとって，有利である場合があるだろう。しかし，これがつづくと，後者としては，いわばだまされまいとして，「欺瞞する能力」のないような個体とやりとりするほうが，欺瞞される危険が少ないことになるだろう。こうして，進化史においては，むしろ，欺瞞する能力の「なさ」が淘汰圧の中をサバイバルする可能性がひらけてくる，のである。

しかし，話はまだこれでは終わらない。もし，自分（のある部分）が，他者にたいして欺瞞できない（正直である）ということが進化史において，サバイバルするのであれば，その自分（のある部分）自体を，自分がだますという誘因が生じるからである。トリヴァースの言う「自己欺瞞」の論理である。

【自己欺瞞の論理】

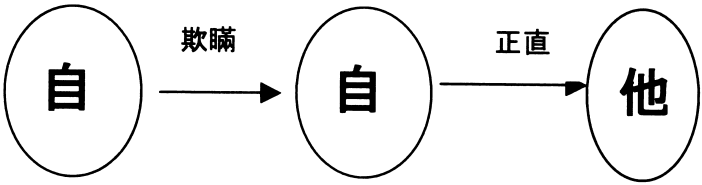
トリヴァースはこういう。「だましには，特に注目に値する一つの特殊な帰結がある。自己欺瞞，すなわち，他者からうまく覆い隠すために自らの意識からも隠すことである。人間だと，落ち着きのない眼や掌の汗，うわずった声は，意図的なだましの自覚に伴うストレスの印かもしれないと受け止められる。自覚をなくすことで，だまし手はだましているという気配を観察者から隠している。」(Trivers 1985＝1991：511)

われわれの脳は一枚岩的にはたらくもののではない。各部分は，かなり，独立的に作用しうる，と現在多くの脳科学が考えているようである。ここにおい

て，脳の一部分が他の一部分を「だます」ことができれば，たとえ，そのだまされた部分が外部にたいして正直であったとしても，その後者の部分は他者に対して欺瞞するわけではないので，赤面などせず，他人をだますことができるだろう。「敵を欺くにはまず味方から」ということばがあるが，いわば「敵を欺くにはまず自分から」ということである。

こうして「他者欺瞞」をうまくやりとげる一助として，ヒトはまずは「自己欺瞞」をおこなうことがあるということがありそうになる。ただし，ここでの自己欺瞞とは，自己の一部（脳の一部）が自己の他の一部（脳の他の一部）をだますのである。トリヴァースは，心理学のある実験を引いて，このメカニズムが実際にヒトの心理において生じていることが実証的に確かめられていると言う（Trivers 1985＝1991：511）

以上の話を図示すると以下のようになるだろう。



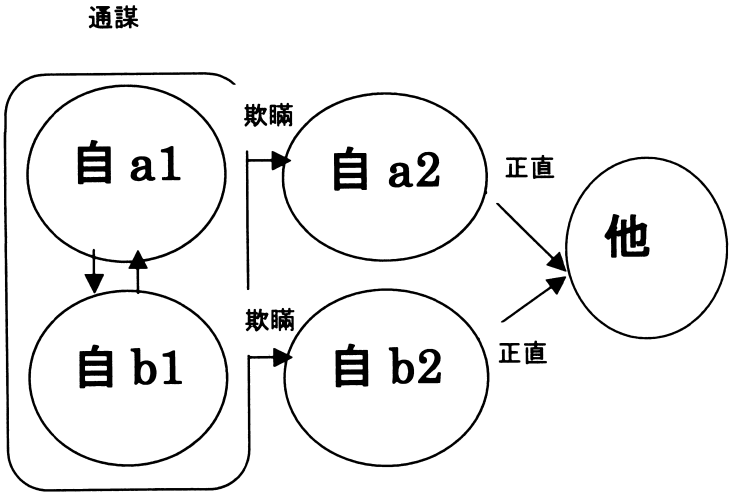
【ワレワレ欺瞞】

以上が，進化論的アプローチからの援用である。以上のような視点に，さらにもう少し展開をつけくわえてみたい。

すなわち，上記のように「自分１」が「自分２」を自己欺瞞するさいに，複数の「自分１」が，「自分２」に対して，「共犯的」（相互通謀的）に欺瞞することがある，という仮説・モデルである（次図）。ここにおいては，複数の「自分１」たちが，複数ないし単数の「自分２」（たち）を欺瞞しているという現象生じているので，「ワレワレ欺瞞」が生じているといいうるだろう。

私が想定するのは，このような複数の「自分１」たちはいわば，「相互通謀」的に共犯関係にあるが，他方で，「自分２」たちはおのおの相互に「通謀」せ

ずに，「自分１たち」から，いわば，「各個撃破」的に欺瞞されるという図式である。



もし，その「だます部分」が「複数のヒト（の脳)」によって「連合」されると，そのだまされる部分は，ヨリだまされやすくなるだろう。

その場合は，複数のヒトビトの「だます部分」相互が「連絡」しあうことが可能で，他方，だまされる部分相互が連絡不能であれば，このメカニズムはより進みやすいだろう。

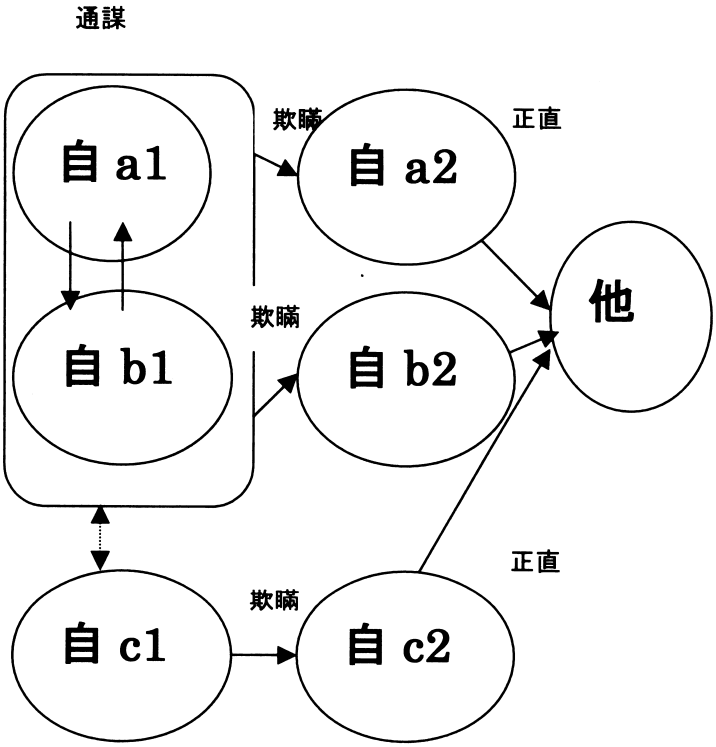
【「ワレワレ欺瞞」の「伝染」】

さていま，このような「ワレワレ欺瞞」に「伝染」している（すなわち，各「自分１」どうしが「通謀」しあっている)，複数のヒトたち（ａさんとｂさんとしよう)，と，いまだ，通謀していない一人のヒト（ｃさんとしよう）とが出会ったとしよう。(次図)

いうまでもなく，ここにおいては，すでに通謀しあっている「自分 a1」「自分 b1」と，未だ通謀しあっていない「自分 c1」とがあらたに通謀しあういわば「誘因」が存することになるだろう。

なぜなら，もし，三つの「自分 a1」「自分 b1」「自分 c1」が「共犯」的に，「各個撃破的に」各自の「自分２」を欺瞞するのであるから，それぞれが単独で，欺瞞するよりもヨリ大きな効果を上げられる場合が多いだろうからである。

以上のメカニズムにおける，各人の「自分１」同士が，ある種の「ワレワレ欺瞞」を通謀し共有しあう誘因をもっていること，そうであるがゆえに，この欺瞞的通謀情報が多くの「自分１」に伝播していくことがありそうなこと，これこそが，人間の間をミーム的にある種の欺瞞的情報が複製され，また老子のいう「美言」が流通していく大きな要因なのではないだろうか。



【以上のまとめ】

以上が「美言（というミーム）が世間を流通する」という現象にたいするコ

ミュニケーションモデルの我々の案である。まとめると，美言の流通とは，一種の他者欺瞞・自己欺瞞として生じうるのではないか，ということである。

すなわち，他者欺瞞をする誘因が存在する場合がある。しかし，ヒトのある部分は，他者欺瞞しにくい性質をもっている。であるとすると，自己（の脳）のある部分が，その「他者欺瞞しにくい部分」自体を「欺瞞」してしまえば，結局のところ他者欺瞞は可能になる。すなわち，自己（の脳）の一部分が，自己（の脳）の他の部分を欺瞞し，その欺瞞された部分が（それ自体は欺瞞することなしであるが）他者を欺瞞する，という三層構造になっている。

さらに，この「自己欺瞞する部分」が複数人間で「連絡」を取り合うことが可能で，他方で「自己のうちの欺瞞される部分」が複数人間で連携を取り合うことができない場合には，前者の諸「自己の欺瞞部分」がコミュニケートしあって，各人の孤立した「自己の欺瞞される部分」を「各個攻撃」（各個欺瞞）すると，よりいっそううまくいくだろう。これが美言ミーム流通の一モデルである。

【流通への制約】

ではこのように美言流通はどこまでも進んでゆくのだろうか。必ずしもそうではない。おもに二つの対抗要因が存在する。第一は「他者の相対的少数化」である。第二は，「他者の賢明化」である。

以上の「第一」と「第二」は，論理的には独立である。が，現実には絡まり合っている場合が多いだろう。すなわち，世間にまだだましたことのない他者が十分多数いる場合には，この欺瞞がもっともよく「効く」だろう。が，だんだんと，だました他者の数がふえていくと，一度だまされた他者はだんだんと「賢明化」してだまされにくくなっていくことがありそうだろう。また他方，まだだましていない「ウブ」な他者の数はだんだんと少なくなっていくだろう。こうして，両方の要因が同じ方向に合成されて，他者をだますことによって得られるうまみは，他者をだました回数の負の関数となる場合が多いだろう。こうして，美言の流通が進めば進むほど，この美言の流通による「自他欺瞞」の

「うまみ」は減じていくだろう。

【短期的な，美言派と醜言派の頻度依存的棲み分け】

以上のように，美言流通に対抗する二要因は，現実は絡まり合っている場合が多い。が，ここでは，あくまで，みとおしをよくするための単純化として，この二要因を二つの時間相に対応させてモデル化してみよう。この二要因は，「論理」上は，どちらが「ヨリ短期的」で，どちらが「ヨリ長期的」かは決まっていない。しかし，現実上は，以下のように，一方が「短期的」，他方が「長期的」となる場合がほとんどだろう。あくまで，ラベルとして，両者を「短期的」「長期的」と呼び分けてみよう。

すなわち，第一はいわば「短期的」時間相である。ここにおいては，「他者」たちが「だまされる」ことによって「全体的平均」として「賢明化」していきだんだんだまされなくなっていくという事情を，無視（固定）することにしよう。すると，美言がヨリ流通することによって，「だます相手としての他者」が相対的に減少していくことのみが，モデル上は鑑みられることになる。

とすると，美言によって「自己欺瞞」している者も，そもそも，その「欺瞞」によって，他者を欺瞞することがその欺瞞の利得の源泉であったのであるから，だます相手に出会う確率が減少すると，「だます」こと自体のうまみが減少していく。(以下，このような場合において上記のような「自他欺瞞」的コミュニケーションをおこなっている者たちの集合を「美言派」と呼ぼう)。

とすると，自己欺瞞する際にも，自分で自分をだますために何らかの実際的・心理的コストがかかる場合が多いであろうから，このような「美言派」が獲得する（コストを控除した）ネットの利得は，自己欺瞞をしないいわば「醜言」派が獲得する利得に相対的にちかづいていくだろう。

このメカニズムがさらに進めば，美言派がさらに増大することで美言派個人が獲得しうる平均利得は減少し，やがては，それが，醜言派個人が獲得する平均利得と等しくなることがある，だろう。

ここにおいては，個人は，美言派になろうと醜言派になろうと，期待利得は

等しい。すなわち，マクロ的には，美言派が増える誘因も醜言派が増える誘因も存在しない状態である。

すなわち，一種の「均衡状態」「安定状態」といえるだろう。

こうして条件によっては，「均衡値」は，美言派が場のすべてを席巻してしまうのではなく，醜言派も場の一部分を確保するような，「棲み分け」状態が生じることになるだろう。

もちろん，条件によっては，このような「棲み分け」にならずに，場がすべて美言派によって席巻されてしまう場合もあり得る。このような場合には，それが美言であることさえ我々にはわからなくなるのではないだろうか。

【長期的な，「他者たちが賢明化する」ことによる変化】

もう一方の時間的要因をかんがえてみよう。他者の方も，だまされてばかりはいないということがありそうなことだろう。そもそもだまされるということは，だまされないことにくらべて，得られる利得（進化論的には相対的な自己再生産力（ダーウィン適応度））がおとるということを（要件的に）含意している場合がかなり多いだろう。だまされていた他者たちの中にだまされないような「変異種」が生起することは，必然的ではないにしても進化論的にはありうることだろう。そして，このようなだまされない他者の変種は，だまされるような他者の当初種よりも，だますような相手がいるかぎりにおいては，自己再生産力がたかく，「ヨリ繁茂」していくといえるだろう。

こうして，「だまされないような他者たち」の相対的な数が増加していくと，「自他欺瞞」する者たちのうまみは減っていく。したがって，前節における「美言派：醜言派」の「均衡的棲み分け比率」は，どんどん「美言派の比率が減る方向に」すすんでいくことになるだろう。そしてもし，本節上記の「だまされない他者」ばかりになれば，「美言派」の存続する余地はなくなり，すべて「醜言派」のみとなることもありうるだろう。

問題は，このようなだまされないようになった他者の新種が他者たちのうちで繁茂していく「速度」である。

この速度が十分に「遅い」場合には，上記の「短期的均衡点」がなだらかに移動していくだけだろう。

しかし，事態は，「美言」にかかわっている。何らかの社会全体のタテマエや多くの個々人の「自我」のようなものに，この「美言」が深く根付いてしまっている（固着している）と，「均衡点がなだらかに移動」しない場合もあるのではないだろうか。このような場合には，ちょうど「唯物史観」でいう「上部構造」のように「美言」が「桎梏」化し，潜在的な社会的緊張が十分高まって初めて美言の崩壊は始まる場合もあるだろう。いわば，ソフトランディングではなくて，ハードランディング的な「文化革命」として，美言の流通は失速する，ということもあるだろう。

【モデルの評価】

以上が，われわれのコミュニケーション・モデルである。比較的単純なものであった。自己のある部分による自己自身の他の部分の「欺瞞」という要因をいれたこと，複数の「自己」における「だます部分」の「共謀」を勘案したこと，「だまされる他者の相対的比率」を勘案したこと，「だまされていた他者がだまされなくなること」をも勘案したこと，モデルを短期と長期に峻別して見通しよくしたこと，などが眼目といえるだろう。はたして，このような簡単なくふうで，当初のわれわれ自身の要求をこのモデルはクリアすることになっただろうだろうか。

【ミーム論への第一の不満に対して】

われわれの第一の目標点は，ミーム論への第一の不満の克服であった。われわれがミーム論に対して持った第一の不満は，ミーム論は，なぜ個体がミームを複製・模倣してしまうのかについて，アドホックな説明しかあたえていないのではないか，ということであった。これにたいして，われわれがここで提示したモデルでは，ヒトにおける自己欺瞞の意義を仮説し，それにもとづいて，「ワレワレ欺瞞」として，ミームをとらえるという方向をとった。このような

方向をとることによって，われわれのモデルは，以下述べるように，美言と醜言との関係，言論の自由とミーム論との関係について見通しを与えることが可能になった，と思う。

ただしいうまでもなく，だからといって，全てのミームが，ここでわれわれが仮説したような「ワレワレ欺瞞」として生起する，ということを主張するつもりはない。流行歌などの現象は，このような視点からは説明しがたいだろうと思っている。

【第二の不満に対して】

われわれが既存のミーム論に対して持った不満とは，老子の最終節をヒントにしたものだった。「なぜ，信ずるに値しないようなことば（美言）が流通してしまう，のか。」「以上のようでありながらも，信言もある程度は流通するのではないか。その程度と理由はなにか」ということである。これらの問題点に関するわれわれの回答はもはやあきらかだろう。すなわち「自・他欺瞞の一種としてワレワレ欺瞞が生じるとき，信ずるに値しないことばが流通することがある。」「したがって，その場合の美言とは，「ワレワレ欺瞞」のことばである。」「頻度依存的均衡のロジックによって，あり得る条件のもとで，美言でないことば（醜言）も，世間の中を流通しうる」となるだろう。

【第三の不満に対して】

第三の不満は，ミルの「自由論」をヒントにするものだった。すなわち，既存のミーム論の視点からすると，言論流通の関して自由原則だけでは，いわば「悪貨が良貨を駆逐する」だけになってしまうようにみえるのではないか。ミーム論の視点から，言論自由の原則は擁護できるのか，と。これにたいして，われわれは，結論的にはミルの言論自由原則に同意するが，ミルが提示しなかった視点によって，となるだろう。すなわち，以上みてきたように，ありうる条件のもとでも，美言派が社会を席巻してしまわずに，醜言派も棲み分け的に繁茂しうる。そして，他者がだまされにくくなるにつれて，醜言派は美言派を凌

駕していくことがありそうになる。

言論に関しての何らかの規制をもうけることは，このような，醜言の長期的な美言凌駕の可能性をたってしまうことになりがちだろう。また，ここでは詳しく論じる余裕がないがヒトの社会における「規制・明文法」などが多くの場合「美言」によって形成されてしまうことを鑑みると，来るべき醜言の復活を担保するような「規制」をあらかじめつくっておくことは人知を越える可能性がたかいだろう。こうして，言論の自由原則が，相対的に支持されることになると思う。

ただし，いうまでもなく，以上のような醜言派による美言派凌駕のストーリーは，必然的なものではない。場合（条件）によっては，「悪貨」としての美言派が「良貨」としての醜言派を駆逐し尽くしてしまうこともありうるかもしれない。しかし，だまされていた他者がだまされなくなる限りにおいて，醜言派の生起・流通する可能性は残っている。

本稿の結論はある意味で楽観的である。情報流通に関して規制がなくても，長期的には美言派にたいして醜言派が凌駕しうる，と述べているから。しかし，これはいうまでもなく，大きな条件のもとで，である。すなわち，だまされていた他者たちのおおくがだまされなくなっていくということを条件としている。この意味で，われわれは，だまされにくい他者，たとえ一度だまされても次からはだまされない他者，になることが望ましいだろう。これは言うは易く行うは難いことである。どうすれば，われわれはだまされにくい他者になることができるだろうか。これについて，いくらか腹案がある。が，この点の展開は別の機会を待たざるを得ない。先述の，山岸の「信頼」論との接続をこのラインで，構想している。

【今後の課題】

以上が我々のモデルである。繰り返すが未だ「単純な・一つの」モデルにすぎない。一つの出発点にすぎない。この視点を，今後はいくつかの方面でさらに陶冶していきたい。

第一は，モデルの「数理」化である。本稿では，いかにも「文科系」的な文体でモデルを記述した。が，進化論的発想を背景にしていることもあって，数理モデル化は可能であるように直観される。数理モデル化がなされれば，各パラメータの値による場合わけを厳格に行うことが可能になり，ありうべき事態の分岐をより精密に記述することが可能になるかもしれない。

第二は，現実の現象との対応づけである。これはさらに二つに下位区分される。まずは，「ヨリ具体的」な理念型（ストーリー）の展開である。具体的なある種のコミュニケーションに着目して，それが本稿のモデルのように伝播していくさまを記述する，という道である。とくに，インターネット上で実際に生じている現象をふまえた上での，舞台をインターネットに限定した理念型の記述を今後試みてみたい。次は，いわば「実証」である。本モデル（ならびに，それに競合するモデル）から検証可能な仮説を出力し，それが現実のデータにどれほどフィットしているか（いないか）を評価する，という道である。トリヴァースの援用のところで述べたように，「自己欺瞞」については，すでに実験心理学的実証研究が存在する。「ワレワレ欺瞞」へと展開させた本稿のモデルもぜひ，実証へと接続させたい。

第三は，他のアプローチとの接続である。先行する著名な社会学諸理論と，本稿のアプローチは，未だうまく接続していない。ぜひ，先行研究と接続させたい。とくに，先に触れた山岸の理論や社会システム論との接続を直近の課題としたい。

文　献

Blackmore, Susan J.1999 *The meme machine* Oxford University Press（＝垂水雄二 訳2000『ミーム・マシーンとしての私 （上）（下）』草思社）

Brodie, Richard, 1995, *Virus of the mind,* Integral Pr.（＝森 弘之 訳，1998『ミーム：心を操るウイルス』講談社）

Brodie, Richard, 2000, “Meme Central”（http://www.memecentral.com/）

Dawkins, Richard, 1989, *The selfish gene,* Oxford Un iversity Press（＝日高敏隆［ほか］訳，1991『利己的な遺伝子』紀伊國屋書店）

Frank, Robert H, 1988, *Passions within reason*, Norton（＝大坪庸介［ほか］共訳，1995『オデッセウスの鎖：適応プログラムとしての感情』サイエンス社）

Heylighen, F. 1998, “Memetics”（http://pespmc1.vub.ac.be/MEMES.html）

Luhmann, Niklas ,1984, *Soziale Systeme : Grundriss einer allgemeinen Theorie, Suhrkamp*（＝佐藤勉 監訳1993－1995『社会システム理論（上）（下）』恒星社厚生閣）

Mill, John Stuart, 1859, *On liberty*, John W. Parker（＝関嘉彦責任編集，1979『ベンサム；J.S.ミル』中央公論社（世界の名著；49））

武内義雄，1988『老子』岩波書店（岩波文庫）

Trivers, Robert 1985 *Social evolution*, Cummings Pub. Co.（＝中嶋康裕・福井康雄・原田泰志訳，1991『生物の社会進化』産業図書）

Wilson, Edward Osborne 1975 *Sociobiology*: the new synthesis Belknap Press of Harvard University Press（＝坂上昭一［ほか］訳，1983－1985『社会生物学（第1巻－第5巻）』）

Wright, Robert, 1994, *The moral animal*, Pantheon Books（＝小川敏子訳，1995『モラル・アニマル（上・下）』講談社）

山岸俊男，1997「心と社会の均衡としての文化　関係の固定性と内集団ひいき」，柏木恵子・北山忍・東洋（編），1997『文化心理学－理論と実証』東京大学出版会

山岸俊男，1999『安心社会から信頼社会へ』中央公論新社（中公新書）